

平成 28 年 9 月 30 日提出

東北福祉大学平成 28 年度外部評価委員会報告（平成 28 年 7 月 20 日開催）

外部評価委委員（長）	東北学院大学経済学部教授	阿部	重樹
外部評価委委員	同志社大学社会学部教授	黒木	保博
外部評価委委員	株式会社進研アド取締役	白石	洋司

1. はじめに

平成 28 年度外部評価委員会は、平成 28 年 7 月 20 日（水）に東北福祉大学管理棟 3 階において、11 時～16 時の時間帯で開催・実施された。

第 2 回目となる平成 28 年度外部評価委員会は、前回開催の外部評価委員会での意見交換を踏まえ、東北福祉大学の理解と準備のもとに、初年次導入ゼミとなる「リエゾンゼミ I」をテーマとして、以下のプログラムにより実施された。

事務連絡・挨拶の後、リエゾンゼミ I についての説明、リエゾンゼミ I 授業視察、リエゾンゼミ I に携わっている教職員、TA/PM のインタビュー、委員によるまとめ、講評と東北福祉大学参加者と外部評価委員との意見交換が行われた。

外部評価委員会には外部評価委員として阿部重樹東北学院大学経済学部教授、黒木保博同志社大学社会学部教授、白石洋司株式会社進研アド取締役の 3 名が、また東北福祉大学から阿部裕二教務部長、中林稔晴企画部長、萩野寛雄教務部副部長の 3 名が出席し、開催された。

外部評価を行うにあたっての資料として、「2016 年度東北福祉大学リエゾンゼミ I 共通内容の手引き」（総合基礎教育推進委員会リエゾンゼミ検討 WG）、総合福祉学部社会福祉学科・福祉心理学科・福祉行政学科、総合マネジメント学部産業福祉マネジメント学科・情報福祉マネジメント学科、教育学部教育学科、健康科学部保健看護学科・リハビリテーション学科、医療経営管理学科のリエゾンゼミ I に係る各シラバス（写し）、マイステップ登録（写し）、東北福祉大学キャンパスガイドが事前に送付されている。

2. 平成 28 年度外部評価委員会プログラム（実際と内容）について

外部評価のために東北福祉大学が準備され、当日実施された個々のプログラムのそれぞれの内容について詳しく詳細に述べることにする。

まず、リエゾンゼミ I の概要について、萩野寛雄教務部副部長より、配布の「2016 年度東北福祉大学リエゾンゼミ I 共通内容の手引き」（総合基礎教育推進委員会リエゾンゼミ検討 WG）に基づきながら、EduTrack により配信されるビデオ教材やリエゾンポータル（マイステップ）の実際の入力画面や集計画面などの画像による紹介などを交えも説明がなされた。

次に、社会福祉学科1年の場合を例として、実際に授業が行われている教室に外部評価委員も参加して、リエゾンゼミⅠが具体的にどのように運営されているかについて理解する機会を得た。われわれが視察した当該曜日・時間のリエゾンゼミⅠでは、環境問題（山中の湖水が生活用水による汚染が進み、生息する稀少品種の魚が絶滅の危機に瀕している状況）をテーマとして、PBL（Problem Based Learning）の手法によりながら授業が進められていた。主担任（教員）、副担任（職員）と5人のピアメンターとともに、20名ほどの学生が参加してグループワークが行われている様子を視察した。

これらリエゾンゼミⅠについての大学側からの概要説明と実際のリエゾンゼミⅠの実際の視察とを踏まえて、社会福祉学科（3年生）、情報マネジメント学科（3年生）、リハビリテーション学科（4年生）のリエゾンゼミⅠの履修を既に終えている3人の学生からインタビューを行った。

この後上の3つのプログラムから得られた知見もとにしながら、さらにリエゾンゼミⅠに携わっている教員（リハビリテーション学科）、職員（支援室・教務係）、ピアメンター（2名）から、外部評価委員の質問に答えてもらう形で、リエゾンゼミⅠについての各自の受け止め方・感想について話しを伺った。

3. 講評（所見）

午前に行われたリエゾンゼミⅠの概要の説明において、学科ごとの特性を反映させるために、通年1年全30回の開講時間の半数にあたる15回分はシラバスの内容は各学科の裁量に任せられているものの、半数の15回分については全学共通のプログラム内容になっているとの説明があった。さらに、全学共通のプログラムはシラバスの内容ばかりでなく、「2016年度東北福祉大学リエゾンゼミⅠ共通内容の手引き」において、「一回一回の授業運営の方法についても、担当教員の裁量には任せられておらず、マニュアル的に統一化が図られている。各学科のリエゾンゼミⅠを担当する個々の教職員は実際にこの手引きにしたがってまさに同一内容と方法での授業を行うことになる。新入生に対する初年次導入科目とはいえ、われわれ大学での教育に馴染んでいる者にとっては、そのシラバスの内容と授業運営方法の統一化について、全学的な、特に教員間の理解の共有化が図られていることは驚きであった。大学執行部のガバナンスと総合基礎教育推進委員会リエゾンゼミⅠ検討WGの取組みについて高く評価したい。

視察をした社会福祉学科1年のリエゾンゼミⅠについてであるが、PBLのケースも学習プログラムとともによく練り上げられていると評価出来るものであった。また個々のグループ（班）に参加しているピアメンターである上級学年の学生たちもファシリテーターとしての役割を十分に果たしていることもあって、この時期における新入生としては驚くほどに活発に議論を展開していた。結果として、主担任・副担任の指導のもとに、それぞれの学習プログラムステージにおける課題にグループとしての考え方をまとめ、発表出来ていた。以上のことから、視察では、リエゾンゼミⅠが今後履修することになるであろう諸

科目において、とりわけゼミ等に象徴される専門性を深める学びと成長にとってその基礎的素養を修得させるという初期の目的を十分に達成しつつあると評価できるものであった。

次に、上級学年の3人の学生からのヒヤリングについてであるが、親しい先生や身近な友人をつくることが出来た、進級してから役に立ったキャンパスマナー、これからの大学生活や将来の夢を考える機会となった等新入時の不安の解消に役立ったという積極的に評価する意見を多く聞いた。他方、学科情報や2年次からのゼミの情報提供の不足等も含めてリエゾンゼミⅠの学科履修上の位置づけの不明確を指摘する声もあった。リエゾンゼミⅠについての概要説明を聞き、実際の視察を終えた後のヒヤリングということを踏まえて言えば、意外にも思われたことであるが、外部評価委員からの「リエゾンゼミⅠの1年生へのお薦め度」を尋ねた質問への回答は80～50点であった。しかしこれは、ヒヤリングに対応した学生たちが3年生と4年生であったことによるものであろうと判断された。彼女たちが履修した時点でのリエゾンゼミⅠ実施・運営上の問題点を東北福祉大学が的確に把握し、課題の改善に向けて精力的に取り組んでいることを改めて確認することが出来たと理解するべきものであろう。

また、教職員・ピアメンターからのヒヤリングにおいては、教員、職員ともにリエゾンⅠに携わることによる負担は大きく大変だという思いを抱いている反面、4年間の大学生活を見通して、初年次に学生の成長の土台作りに係れる意義は大きいという認識が共有されていることが理解された。教員、職員2名による担任制については、教員側からは職員からの支援の不可欠さについて、また職員からはそのそれぞれのキャリアを生かすことが出来る貴重な機会となっているとの意見など、リエゾンゼミⅠを総じて積極的に評価していることが理解された。

リエゾンゼミⅠという初年次導入科目の位置づけ（意義）について、全学的な理解の浸透がかなりの程度図られていることの一つの証左であろうと思われた。

しかしその一方では、上に紹介をした負担感の表出とともに、教育プログラムが盛り沢山なのでは、ボリュームをもう少し抑えても良いのではとの声も聞かれ、受講生間の学びと成長の差が大きくなっていることへの懸念とともに一回一回のゼミの内容がもう少し丁寧に授業運営される必要性も示唆された。この点については、今後のリエゾンゼミⅠを検討する際には一考されることを望みたい。

また、ピアメンターを担う上級学年が学生たちからは、その謝礼の少なさの一方で、かつての体験を踏まえて、自分たちも後輩の新生生の役に立ちたい、大学の重要な教育プログラムに係り、貢献（奉仕）出来るとの思いを聞いた。福祉系大学ならではの校風なり、教育理念を垣間見たという思いをもつ機会となった。

以上のことを考慮に入れる時、リエゾンゼミⅠの担当教員やピアメンターの選任の方法には学科ごとに裁量の余地が認められており、それぞれに工夫されていることは評価される点であろう。

実際にヒヤリングでも東北福祉大学における特徴的な科目の一つだと思う、年々リエゾ

ンゼミ I のプログラム内容も厚みを増し、授業の運用も洗練されてきていると思う等の意見が述べられていたが、われわれ外部評価委員一同も同様に、リエゾンゼミ I は、全国的にみても特色ある、良い実践がなされている取組みとなっているという点で大いに評価出来るものであるとの一致した理解を得た。

なおその上で、そのような高い評価が与えられるものであるからこそ、上に述べた問題点の改善等に今後とも努められつつ、さらにまたこれまでリエゾンゼミ I についてはそれほど外部への情報発信がなされていないようであるので、オープンキャンパス・進学相談会・大学案内など高校生および保護者、進路担当者等高校教員を対象とした東北福祉大学への理解を得ることを目的とする取組みにおいて、先駆的な取り組みをされていることから積極的に情報提供の機会をぜひ設けられることを提案したい。